

論 文

ステュアート『原理』における「奢侈」について (一)

小 林 昇

序 論

第一章 近代社会の展開における「奢侈」の意義 (以上本号)

第二章 トレードと「奢侈」

第三章 『原理』における奢侈論の特質——学史的展望——

序 論

この小論は、ジェイムズ・ステュアート『経済学原理』(James Steuart, *An Inquiry into the Principles of Political Economy*, 2 vols., 1767)⁽¹⁾の理論構造と学史的意義とを、いわゆる貨幣的分析の体系(貨幣的経済理論)⁽²⁾というその特質に即して、明らかにすることを目的とする。ただし、全五編から成る『原理』の体系はきわめて龐大であるから、おもに、その理論的基幹部分であり同時にその達成の主要点をふくむ第一・第二の両編が、後続の三編への接続に留意されつつ分析の対象となる。⁽³⁾

ステュアート『原理』における「奢侈」について (一)

(1) 全集版 (*The Works*, 6 vols., 1805, vols. 1—4) の頁をも初版本 (ただし堀教授による復刻版) の頁に並記する。I, 395/II, 79 とどうも示されたはあらず。初版本では vol. I, p. 395, 全集版では vol. II, p. 79 であることを示す。なおこの書名は以下には *Principles* または『原理』と略称。

(2) かわゆる、実物的分析 (real analysis) に対する貨幣的分析 (monetary analysis) の特質については、さしあたり、J. A. Schumpeter, *History of Economic Analysis*, 1954, pp. 276—82 (東畑訳『済経分析の歴史』第二冊、五七九—八九頁) を見よ。これによれば、それは (一) 現実の経済過程において貨幣が第二義的な重要性しか持たない (貨幣の中立性) という命題を否定し、(二) 貨幣的要素を体系的分析の基盤に導入して物々交換のモデルの支配を放棄し、(三) 集計的分析やマクロ的分析と密接に関連し、(四) 貨幣・財政政策においては費消 (spending) を歓迎し貯蓄に反対する態度と結合する、などの特徴を持つものである。シュムペーターの叙述自体は貨幣的分析の方法の強調に対する警戒と批判とをふくみ、とくに学史的問題としては、テュルゴールおよびスミスによる、この方法の克服の意義を評価して、「十八世紀の終りの四半世紀における貨幣的分析の敗退、というよりもむしろ崩壊の理由は、その薄弱さであった」(*ibid.*, p. 288, 邦訳、(一) 六〇〇頁) と断言している。しかも、以上の叙述をふくむ『分析の歴史』の第二編第六章は、それが未完成であったこととおそらく無関係に、ステュアートについては触れていない。ところが一方、この書は別の場所 (別の理論的関連) で『原理』をとりあげ、これを「厳密に体系的な特質の本」でありしかも「第一級の重要性を持つもの」だとしているのである (*ibid.*, p. 176, 邦訳、(一) 三六七—八頁)。だから、『原理』に対するこの小論の関心の方向は、シュムペーターのそれとはちがうということになる。この小論での分析はむしろ、『原理』に対するケインズ——シュムペーターの上述の特徴づけのなかには、すでにケインズ体系に対する批判が明示的にふくまれている——の側からの関心と、さらに根本的には、ほかならぬシュムペーターによって「現代の貨幣的分析の指導的人物」(*ibid.*, p. 280, 邦訳、(一) 五八五頁) と呼ばれたケインズの『一般理論』そのものの持つ理論的性格と『原理』の体系のそれとのあいだの相似あるいは照応という事実とを、手がかりとして出発するものである。しかし、この分析をどういう理論的基盤にまで深めるかはわたくし自身の理論的立場によるものであって、それはケインズのものとはことなる。この問題には、学史的分析に特有の複雑さの一つのばあいが見示されているといえるであろう。——右の方法上の問題については以下の本文でしだいに関説されるが、ここでは用語に関連してあらかじめ最小限のことわりがきをしるした。

なお、貨幣的分析と同義に用いられる貨幣的経済理論 (theory of monetary economy) の語は『一般理論』のものである (cf. Keynes, *General Theory*, p. 293. 塩野谷訳、三五四頁)。

(3) この小論は一九五一年に書かれた筆者の論説「ジェイムズ・ステュアートの経済学説」(同著『重商主義の経済理論』所収)の主要な部分の、修正をふくむ発展をこころざすものである。わたくしは旧論説に対する積極的評価と批判との双方に感謝しているが、それにともなった若干の誤解をも、この機会に解きたいと願っている。

経済学史における『原理』の意義の根ざすところは深く、その貢献も多面にわたっている。それは近代商品生産社会の展開、を自由な農民と自由な工業者との分離の過程として追跡し、経済成長の理論 (theory of economic growth) と呼ぶうるものをはじめ構築した⁽⁴⁾。しかもそこには右の過程が近代社会そのものの基礎過程であるとする認識があり、そのかぎりこの体系が唯物史観あるいは「経済史観」(economic interpretation of history)を開拓したと見ることに理由がある⁽⁵⁾。だが、この局面での『原理』の意義は、さらにすすんで、それが原始的蓄積の基本的過程を対象とし、この意味で、『剰余価値学説史』の指摘するように、「生産諸条件……と労働能力(労働力)との分離過程がどのように進行するかを」⁽⁶⁾けっして直接にはないが、「証明し」、近代資本主義の成立過程を描いたところにある⁽⁶⁾。いわゆる evolutionist としてのステュアートの意義はここに示はられなくてはならない。ところで『原理』はまた、当時の貨幣・物価論争の渦中において、『経済学批判』が教えるように、みずからの制約と混乱とを排しながら、「貨幣の本質的な諸形態規定と貨幣流通の一般的法則とを発見」⁽⁸⁾し、それが到達した水準は、理論自体の分野では、スミスやリカードによる克服を許さなかった。一方『原理』は、『国富論』との連接の局面においても、価格の構成(↓生産費)の分析を深めて、ペティに発する労働価値論がスミスに至って資本主義分析の用具となるうとするための地均しをおこない、同時に、一面での「譲渡利潤」の観念にもかかわらず、生産過程一般における剰余

価値の発生の事実には、ようやく分析の手をかけたのであった。⁽⁶⁾

- (4) cf. S. R. Sen, *The Economics of Sir James Stewart*, 1957, p. 19.
- (5) cf. *ibid.*, p. 49. なお、センはこの「経済史観」について、「それはステュアートが生きかつ書いた時代にとってたしかに異常なものである」と述べている。もとより、『原理』にあっては後述のように、経済の発展を左右するものとしての為政家(ステイツマン)の役割がきわめて大きく、その経済学体系の本質を科学的と呼ぶことを妨げているが、しかし一方、ステイツマンの行動様式は近代社会の展開の原理そのものを左右することはできないとされているのである。だがこのかぎりステュアートの体系は、むしろ彼の時代の思潮のひとつを示しており、スミスをめぐむいむゆる「スコットランド歴史学派」とのかかわりにおいて、検討されるべきものを多く含むと考える。この方面からの『原理』の研究と、それにもとづくあたりじいパースペクティヴの設定とは、スミスとその時代との思想的研究の隆盛にもかかわらず、まだほとんど着手されていないようにもあらう。わずかにニータがじの論説できわめて簡単にこの問題に触れていることとを考へ。R. L. Meek, *The Economics of Control prefiqued by Sir James Stewart, Science and Society*, vol. xxii, 1958, no. 4, pp. 299—301.
- (6) Marx, *Theorien über den Mehrwert*, hrsg. von dem Institut f. M.-L., I, S. 9. 長谷部訳、青木書店版、第一分冊、四八頁。
- (7) cf. H. K. Grossman, *The Evolutionist Revolt against classical Economics, Journal of Political Economy*, vol. li, 1943, no. 5—6.
- (8) Marx, *Zur Kritik der politischen Ökonomie*, Volktausgabe (Dietz), 1951, S. 179. 大月版『選集』、補巻c、一九三頁。
- (9) 田添京二「重商主義における生産過程論——ステュアート『真実価値』の構造」(福島大学『商学論集』二七ノ一)、同「重商主義生産過程論の到達点——ステュアートの利潤論」(同上、三〇ノ三)、小林昇「ステュアート『原理』における利潤のつづて」(『立教経済学研究』十四ノ二)を見よ。

『原理』のおこなった以上の諸貢献は、理論の細部にわたるその他の多くの達成と、全巻の各所に見いだされるき

わめて示唆に富む豊富な歴史的叙述とを別にしても、この書を学史上のすぐれて重要な文献とするに十分である。しかし、『原理』の体系の根本的特質とそれにもとづくこの書の意義とについていえば、それはこの大冊がいわゆる貨幣的分析の最初の、しかも整備した、理論・政策体系を樹立したということである。このかぎりでは、『原理』は、『マルサスの『経済学原理』をなかに挟んで、むしろマルサスよりも明白に、その理論的性格の根本において、ケインズの『一般理論』と照応し、いわゆる formal parallels を形成する。有効需要の観点・マクロ的分析・経済統制の構想 (economics of social control)⁽¹⁰⁾ ——これらは両者が古典派的思考のパターンにはっきりと対立して共有したところのものであった。ケインズはステュアートについてまったく知らなかったが⁽¹¹⁾、まさにケインジアン立場からおこなわれたセンのステュアート研究が、ともかくもまとまりのよい成果を示していることは、この事実にも因るものである。⁽¹²⁾したがって『原理』の分析によってこの事実を明らかにし、理論史 (Dogmengeschichte) としてステュアート↓マルサス↓ケインズの系譜を描き出すことは、それ自体有益な作業として評価されるべきものである。⁽¹³⁾それはいわば理論的類型の確定の作業であって、経済学史のみならずさらに経済史の研究にとり、さまざまの意味において索出的意義を持ちうることもなるであろう。この意味から、『原理』はまず、『国富論』と対比させつつ描かれるべき学史的対象なのである。

(10) cf. Sen, *op. cit.*, p. 187.

(11) ケインズ『一般理論』における重商主義への積極的評価(第二十三章)は人の知るところであるが、そこにおいては(またケインズの他の著作においても)、当然強調されるべきであった『原理』の存在についてまったく言及がない。それはケインズに重商主義に関する知識を与えたヘクシャーの名著『重商主義』(Engl. transl., *Mercantilism*, 2 vols., 1935)が、その叙述の下限をほぼ一七二〇年に限っているため、ケインズの知識あるいは想起がステュアートにおよばなかったからである。

ステュアート『原理』における「奢侈」について (一)

る。なお、古典派的伝統に立つすぐれた理論家でもあったヘクシャーは、歴史家としての知識を駆使して、『一般理論』における重商主義論に批判を加えた。それは『重商主義』の増補版(一九五五年)に“Keynes and Mercantilism”と題して収められている。この論説にもステュアートへの言及はない。こうして、この両巨匠の論争は、惜しいことに、われわれのもっとも関心を寄せるべき文献を抜きにしておこなわれたのであった。しかしケインジアンによるステュアート復興のこころみは、ケインズの学史的関心からも必然に導きだされるものである。

(12) cf. *Sen, op. cit.* この書はきわめてケインズ的であり、前掲のミークの論説はその方法的批判を目的とするものであるが、他面、この書は豊富な学史的実証をふくみ、有益である。

(13) この種の業績として、松浦保「ステュアート・マルサス・ケインズ——貨幣分析の一系譜——」(『三田学会雑誌』五二ノ二)をあげておきたい。これは簡潔な好論説である。

とはいえ、もとより右の作業は、それ自体軽視すべきものでないけれども、学史的分析のためにはやはり準備的な作業にとどまる。われわれは、類型をいちおうおなじくする諸理論体系がそれぞれ段階を異にする経済史的基盤の上に成立したことを知っている。したがって、この事実をいっそうはっきりと解明し把握すること、すすんでそれぞれの体系がその時代を実現を意図した階級的利益を認識すること、こうしてこれらの体系が学史上に果たした役割と時代におよぼした影響とを明らかにすること——これが、分析のつぎの段階の課題でなくてはならない。この課題が果たされると同時に、それぞれの体系のいっそう厳密かつ詳細な再構成が可能となり、それらの内部で真に学史的意義を持つ部分の確定がおこなわれうることとなる。そうしてここから、時代を異にしつつ類型を同じくする理論体系が存在することの意味や、学史における特定の体系の復活・再評価の意義や、さらに分析用具の継承および発展——*Dogmengeschichte*——と経済学史そのものの発展とのあいだの関連の構造⁽¹⁴⁾などが、しだいに明らかとなるであろう。それは学史的分析における総体的把握の局面にかかわることであるが、ともかくもわれわれは、『原理』の分析

にあたっても、それがこの書の理論的類型の把握にとどまりえないことを、あらかじめここで確認しておかなくてはならない。

(14) この問題の解明は、学史の方法論上の課題として、不毛の論争を避けるためにとくに必要とされる。

しかし——ここが大切な点であるが——、以上は当然のこととはいえ、われわれの方法的認識と分析の実行とのあいだには、つねになにほどのギャップがある。そうしてとくに、久しく研究史の主流の外にあったステュアートおよびその『原理』という対象のばあい、この現象はいちじるしいように思われる。われわれがケインジアンによる『原理』の再構成および再評価に対して批判をおこない・彼らの分析の究極における歴史的方法の欠如を指摘するにあたって、『原理』の貨幣的分析が持つ重商主義（メルカンテイル・ジステーム）的制約⁽¹⁵⁾あるいは本質を明示して、これに対する『国富論』体系の理論的先進性と優越とを再確認するにとどまるならば——しかもとくにそれがマルクスによる『原理』への関説の範囲に局限されるばあいには——、学史分析としてのポジティブな成果を多く期待することができないであろう。なぜなら、われわれはさらにすすんで、『原理』の貨幣的分析の体系を、ひとつの完成されたメルカンテイル・ジステームの体系としていっそう詳細に分析しなくてはならず、さらにまたこれを、さまざまな階級的利害が錯綜しつづつあった重商主義末期（解体系）における、独自のヴィジョンを持つひとつの個性的体系として、他の諸体系との比較と関連とのなかに置いて検討しなくてはならないからである。この第二の論点についていえば、一方では、『原理』の時代的・階級的背景はきわめて複雑であって、『原理』に対する理論的分析と『原理』自体の提供する史的（過去および当代の）記述とで経済史研究の成果をたえず再構成しつづつ、これをあらためて『原理』の理解に役立てることが要求される。他方では、歴史的画期としての重商主義、とくに名誉革命以後の、わたくしの

いわゆる固有の重商主義期は、すでにペティ以来——ただし保護主義と貿易差額説との外被のもとでけって単純でない径路を踏みつつ——古典派的思考と経済学の基礎的諸範疇とを喰んでいたものであって、この潮流に透過されつつ（また部分的にはこの潮流をおしすすめつつ）も、ついに全面的にこれと対立したところに、『原理』の具体的な姿があり、その体系の個性的な特質があったのである。

(15) やがて示されるように、『原理』はさらに、その貨幣的分析の方法とはむしろ矛盾しつつ、重金主義（モネタール・ジステーム）の制約をもつよく示している。

したがって、初期産業資本（マニユファクチュア資本）を主体とするイギリス重商主義体制の末期に、『原理』のメルカンティル・ジステームがどのような政策的構図を持ったかは、単純な段階論的把握を越えて探究すべき課題である。だが、問題の複雑さはここにとどまらない。それはステュアートの特異な生涯と、それに制約された『原理』の成立事情ともとづくものである。スコットランドの貴族ステュアートは、はじめ一七三五—四〇年のあいだ大陸諸国に遊学し、ついでジャコバイトの乱後は亡命者として四五—六二年のあいだたび大陸に流寓した。これは通算して二十年を越える期間である。この間、彼は、急速かつ強力に原始蓄積を推進する故国の事情にじかに接することができなかつた。のみならず彼の全生涯は、世界史の先端に立って産業革命を準備しつつあったイングランドの諸事情を直接見聞する機会に、きわめて乏しかったと推測される。そうして彼の『原理』は、大陸の流寓中に抱懷され、その根幹を成す第一・二編は、すでに五七—七八年に南独のテュービンゲンで脱稿された。この原稿は、彼の帰国後にロンドンで出版されたとき、ほとんど原形のままであったと考えられる。⁽¹⁶⁾ しかも『原理』の執筆に着手したころのステュアートは、みずからの将来について十分はっきりした見通しを持ってなかつたから、『原理』のなかのステュア

トは、自己と家族との生活上の配慮から、その顔をイギリスに向けたり大陸（フランス・ドイツ）に向けたりしてはならなかった。この事情は『原理』の国籍が慎重に問われねばならないことの理由なのであり、『原理』の現実的背景と理論構成とに複雑さを加重する大きい要因なのである。⁽¹⁷⁾

(16) 『原理』の第一・二編は本文にわずかな注が書き加えられており、その様式は、執筆時の本文がそのまま保存されたことを推測させる。全集版の本文にはかなりの補筆がある (cf. Sen, *op. cit.*, Appendix A. 2) にセンが『原理』の corrected copy といっているものは、全集版の底本となったものであることがほぼ確実である) が、それは初版の論旨をすこしも変えるものではない。

(17) 以上については、筆者稿「ステュアート『原理』の歴史的背景」(本誌十三ノ二)を参照。

しかし、右の事情にもかかわらず——あるいはかえって右の事情のゆえに——、ステュアートは『原理』の作成にあたって、国籍の制約をこえた、彼のいわゆる「世界市民」(citizen of the world) の立場から、経済における諸原理 (principles) の確認・演繹的方法によるその整序・これによる一個の科学 (science) の建設をこころざしたのであって、『原理』の一方における特質である、過度の抽象化と一般的法則 (general rule) の強調との否定、経験と国民的個性 (spirit of a people) との尊重等の態度は、研究史上はこれへの評価の偏重を生んだものであった⁽¹⁸⁾にもかかわらず、彼の右の基本的立場と方法とに従属しつつこれに厚みを与える要素にとどまったといわなくてはならない。ここに、ステュアートとドイツ歴史学派との根本的相違がある。彼は右の立場を持しつつ、冷静かつ執拗な観察と読書とを積み、ときに不便を漏らしながらもできるかぎりはイングランドの事情をも学び、こうして『原理』の根幹を構築したのであった。そこにおいてはすでに、多くの重商主義の文献とは異なって、経済的著作が特定の時点における特定の階級の要求の直接の理論的表現であることは意識して避けられているのである。こういう要求は、

ただ『原理』を究極において制約するものとなるにとどまったのであった。

(18) その代表的文献としては、W. Haasbach, *Untersuchungen über Adam Smith und die Entwicklung der Politischen Ökonomie*, 1891, Kap. 6があげられる。

こうして『原理』は、啓蒙主義史観に根ざす、いわゆる conjectural economic history⁽¹⁹⁾ として農工分離・商品経済の展開の過程（近代社会の成立過程）を理論的に描くとともに、これと緊密に結合させ・そこにステュアートの根本的特質を示しつつ、貨幣的分析の体系・有効需要の経済学を、大規模にまた一貫して展開したのであった。この二つの要素の結合と、そこに必然に示される経済統制者 (statesman) の積極的役割とは、『原理』の体系に、いわば原始蓄積の一般理論としての構造と意義とを——その個性的特質とともに、またもとよりその制約とともに——与えるものであった。したがって、『原理』の行間に屈折しつつ反映しているきわめて複雑な経済的・階級的背景を分析・整理しつつ、産業革命（↓資本制的蓄積）と古典学派との準備期におけるミネルヴァの梟としてのこの大きな体系の、緊密な構造を復元してその理論的達成の高さを確定すること、そうして右のような意味での『原理』の学史的意義を明らかにすること、——これがわれわれの分析の究極的目標でなくてはならない。『原理』に対決してその克服をこころざした『国富論』体系の意義も、『原理』とマルサスとの関連の内容も、ステュアートとケインズとの照応の意味も、この作業によってはじめて理解されることとなるであろう。

(19) cf. E. A. J. Johnson, *Predecessors of Adam Smith*, 1937, pp. 215, 220.

冒頭に示したこの小論の目的は、右のような課題のなかに置かれ、その重要な一面を成すものである。いうまでもなく、それはけっして、『原理』の分析に藉りて超越的にメルカントイル・ジステームを擁護し、貨幣的分析の

方法の優越を説き、ケインズによるマルサス復位の態度の全面的承認のうえにこれをステュアートにまで及ぼそうとするものではない。(しかし、くりかえして言えば、それは貨幣的分析の系譜をステュアート↓マルサス↓ケインズに即して描くこと自体の意義を否定するものではない。)この小論が貨幣的経済理論としての『原理』の体系をその骨格について再構成しようとするにあたって、とくに表題の示すようにこの書における「奢侈」論の分析をつうじてこれをおこなおうとするのも、できるだけステュアートという個人と彼の時代との関心に密着することによって、上述の学史的課題の解決に近づこうとするからである。

× × ×

さて、『原理』はその「序文」でみずからの課題と方法と構成とについて一般的に語っているが、そこですべての命題が普遍的に理解されるべきことを論ずるにあたって、特例として具体的に、「奢侈」(luxury)という言葉の用法が一樣でないことを例示し、つぎのように述べている。「ある人は奢侈を、国家の繁栄と両立しないという。他の人は奢侈を、国民の福祉と幸福との源泉であるという。実際には、これら二人の気持には相違はないといつてよいであろう。前者は奢侈が外国貿易に有害であり人民のモラルを腐敗させるのだと考えているのであろうし、後者は奢侈を、そのインダストリによって生きなくてはならぬ人々に就業 (employment) を与え、住民の全階級のあいだに富と生活資料とのむらのない流通を促進させる、手段と見なしているのであろう。もしも彼らの各々が他方の持つ奢侈という複雑な觀念に、そのすべての帰結とともに、注意するとしたならば、彼らはその命題をもっと一般的にではなく「表現」したであらう。」²⁰つまり、奢侈という語の用法の明確化によって、この語をふくむ命題を限定し、こうし

てその命題を普遍的に受入れられるものにすべきだというのである。ともあれここに、重商主義をつうじての論争ののひとつであり、とくにマンドヴィルの『蜂の寓話』以来学者の関心を集め、ステュアートの時代の学界でも有力な論題であった、奢侈論についての『原理』のつよい関心を見ることが出来る。同時にまたここには、奢侈論についての二つの対立する命題を綜合した、『原理』自身の奢侈論の骨格と、それをつうじて貨幣的分析の複雑な手続きをおこなおうとするステュアートの態度とが、集約的に示されているのである。

(20) *Principles*, I, x/xiii-xiv.

こうして「奢侈」の問題は、『原理』の第二編では、近代社会の展開における貨幣の導入の段階で、商品・貨幣経済における需要の問題として第六章に正面から登場する。この第六章は、農工分離の過程を対象として「人口と農業」(Of population and agriculture) と名づける第一編の諸章の序列のなかで、「人類の欲望はどのようににその増殖を促進するか」(How the wants of mankind promote their multiplication) と題されているが、理論的素材の面からいえば、それは「奢侈と貨幣」と呼ぶべきものである。そうして第一編では、「奢侈」は、近代社会の展開のための——さらにはいえば、この近代社会の生産力的基礎としてステュアートが把握した、自由な商品生産者(freeman)の勤勞すなわちインダストリ(労働のブルジョアの形態)の発達のための——不可欠の誘因として取扱われる。ところが第一編「トレードとインダストリ」(Of trade and industry)にあらたにトレードという主題が導入され、それがおもに外国貿易の問題として論ぜられることになって、奢侈論の展開は複雑さを加えることとなる。そこでは、冒頭におけるトレード一般と商人との登場とともに、すでにその第二章「需要について」(Of demand)において第一編での欲望→奢侈という取扱いは欲望→需要一般という取扱いとして、理論的にいっそう形式

的に整備され、また蔽密になる一方、これと相覆いつつ、「奢侈」はとくに外国貿易に関する阻害的要因として詳論される。そうしてこの編の後半の第二十章に至つてようやく「奢侈について」という題名が現われるのは、「奢侈」の積極的效果は、外国貿易による富の増加が外国貿易そのものを衰退・消失させる段階において——国内における補償的な有効需要と就業との創出要因として——はじめて十分に認められるとするからである。こうして、『原理』における奢侈論と、これに集約される有効需要論とは、第一編においてその原理を、第二編においてその体系的構成を示しているといえるであろう。しかもこの構成のなかには、第三編以下の広汎な展開——そこできわめて内容の豊富な貨幣・信用・財政論は、貨幣的分析の系譜のなかに置かれるマルサスの体系がついに持たなかつたものである——への伏線が、いちいち明示的にすでに張られているのである。

わたくしはこの小論では、分析を基礎的理論の領域にかぎり、その展開の部分には及ばないから、上述のように、対象はほぼ『原理』の第一・第二両編に限定される。このばあい、とくに第二編は、論理のらせんの進行（したがって叙述の幾重もの重複）という、『原理』の特徴がいちじるしく、また経済理論の展開をささげる古い通念（耐久財(21)・富観およびモネタール・ジステム）の混淆も、第一編におけるよりもはるかにきわ立っており、これが合して、この編の全体をきわめて見通しにくくし、さらにステュアート自身が認めたように、この編を全巻とのつりあいの点で不当に大きくしている(21)。したがってこの編の理論的整理は、もとより第一編の分析を基底として、ことに綿密におこなわれなくてはならないであろう(22)。この作業はまた同時に、最近とくにわが国で幾人かの専門家によって開拓されはじめた、第三編以下の分析(23)に対して、直接の序論を提供すべきものである。

(21) cf. *Principles*, I, 347/II, 15.

ステュアート『原理』における「奢侈」について (一)

(22) この意味では、この小論は、『「原理」第二編の分析・(一)』と副題をつけた、筆者稿「ステュアート『原理』における「利潤」について」(前掲)の統稿でもある。

(23) この領域ではつぎのものがあげられる。高木暢哉「ステュアートの信用論」(同著『信用制度と信用学説』第七章)。木村元一「ジェームズ・ステュアートとその財政論」(『一橋論叢』二五ノ三、三一ノ四)。同「ステュアート財政論再論——セン氏の『ステュアート経済学』に寄せて——」(同右、三九ノ五)。大川政三「重商主義における消費税の諸論拠——ジェームズ・ステュアートの所論を中心として——」(茨城大学文学部紀要ト社会科学一九)。戒田郁夫「ジェームズ・ステュアートの公債論——イギリス公債論史研究の一齣——」(一)。関西大学『経済論集』十ノ六。川島信義「ジェームズ・ステュアートの銀行理論」(九州大学『経済学研究』二六ノ二)。同「ステアートの『流通の銀行』について」(同右、二七ノ一)。同「ステュアート信用論の特質」(一)(西南学院大学『商学論集』八ノ二)。なお、これらに先立つものとして、新庄博「重商主義の貨幣経済論——ジェームズ・ステュアートの研究——」(新庄・高橋・塩野谷編『貨幣理論と貨幣制度』所収)をあげておきたい。

貨幣的分析の体系としての『原理』の基本的特質は、このような解明の手続きののちにおいて、別種の視角から——ただしもとより相互の連関のもとに——おこなわれる分析の成果と合せて、原始蓄積の一般理論としてのそのいっそう大きい、しかも個性的な、構造のなかに定着されるであろう。そうしていま一度いえば、このようにしてはじめて、一方に『原理』と『国富論』との対立と継承、『原理』とマルサスの系譜上の関連、『原理』とケインズとの照応、などについての探究の作業が可能となるはずである。だが、わたくしはこの小論では、その限定された主題に即して、『原理』の奢侈論について分析をこころみるほか、重商主義者たちやヒュームからフィジオクラットをふくんでマルサスにいたる、奢侈論の展開のなかでの当面の対象の位置について、わずかな言及をおこなうにとどめるであろう。

第一章 近代社会の展開における「奢侈」の意義

一

『原理』第一編は、近代社会を自由な商品生産者の社会として捉え、その歴史的特質と展開のすじみちとを、上述のいわゆる *conjectural economic history* のかたちで——そのかぎり人類史一般の展開の原理との部分的混同を残しつつ——第五章以下にはぼつぎのように描いている。⁽¹⁾

(1) 詳細には、田添京二「ステュアート蓄積論の基礎構造」(内田義彦編『古典経済学研究』、上、所収) 第二・三章、および筆者稿「ステュアート『原理』における人口と農業生産力」(本誌十三ノ四)を参照。

まず、出発点としてつぎのような社会が措定される。「われわれはひとつの国、すなわち自生物 (*spontaneous productions*) に富み、あらゆる種類の改良を容れることができ、そこに住む人民が、自由な政府 (*free government*) の下で、トレードもなく奢侈的、技芸 (*luxurious arts*) もなく野心も持たないという、もっとも純粋な単純性 (*most refined simplicity*) のなかに暮らしている国を想定しよう。」⁽²⁾ この「自由な社会」⁽³⁾ は素朴な農業社会であり、そこでの「自由な人民」⁽⁴⁾ ・自由な生産者である農民は *farmer* (farmer) と呼ばれる。このファーマーのおこなう労働は剰余農産物を生むはずであるが、これは社会的剰余として、土地の上で労働しない人々を養うことを可能にする。これらの人々は土地からの解放のゆえにフリー・ハンズ (*free hands*) と呼ばれ、これもまた自由な人民である。そうして、原初の自由なファーマーの社会は、しだいにその生産力を発達させて右のようにフリー

ステュアート『原理』における「奢侈」について (1)

・ハンズを分出しつつ、上述の素朴な風習の段階を捨て、人口の増加・福祉の増大・豊かな個人的消費(↓「奢侈」)を実現し、「自由で完全な社会」⁽⁵⁾といえるような、近代社会の理想に近づこうとする。だがそのためには、ファーマーの生産する社会的剰余(剰余農産物)⁽⁶⁾が、一方では彼らの側の食料(および原料)として、他方ではフリー・ハンズによる製造品として、相互に「適当な等価物」(proper equivalent)⁽⁷⁾の資格において交換され、しかもこの過程が深くまた全面的に進行しなくてはならない。それはつまり、商品生産というかたちでの社会的分業の完全な展開であり、『原理』の用語に即していえば、生産者間における「相互的欲求」(Reciprocal wants)の充足と「相互的責務」(reciprocal obligations)の履行とにもづいて、「全成員のあいだに一般的依存関係をつくりだす」ことの達成なのである。⁽⁸⁾『原理』はこのような社会を支える労働、すなわち直接に商品を生産する自由かつ独立な労働をインダストリ(industry)と呼んで、これを強制的な・そうして直接に交換価値をつくらない、労働であるレイバー(labour)と原理的に区別した。⁽⁹⁾この区別によって、労働の古代的および中世的形態に対立する、労働のブルジョアの形態が明確に把握されることとなったのである。⁽¹⁰⁾

(2) *Principles*, I, 26/33—4. 傍点小林。

(3) *free society*. — I, 176/237.

(4) I, 28/36. *freemen* (I, 2/3), *free and independent men* (I, 149/199) などの表現も参照。

(5) I, 83/109.

(6) *superfluity, surplus*.

(7) I, 27/35.

(8) I, 84/110. *reciprocal wants* の語は *bk. I, 28/36* を見よ。

(9) *インダストリ*, I, chaps. vii, xiv を見よ。ただし *bk. II, chap. I* (I, 166—7/223

—4) にならなわれてこそ。

(10) cf. Marx, *Zur Kritik der politischen Ökonomie*, a. a. O., S. 56. 邦訳、前掲、五一頁。

『原理』が近代社会の展開の起点に「全成員が自由な」農民社会を想定したことは、モデルの設定という操作のうえでは正当であり、そのかぎり、『原理』の一方での具体的な経済史的把握と矛盾するものではない。ただそこでは、十八世紀の合理主義の制約のゆえに、ときとしては右のモデルが人類史一般のモデルと混同され、その結果、近代の起点である自由な農民の社会が原始社会（いわゆる原始的自由の社会）と混同されて韃靼（ダツタン）人やアフリカの土民やアメリカ・インディアンの社会と竝記される。⁽¹²⁾ 『原理』第二編の「緒言」が第一編をふりかえって、ここでは超時代的な政策原理が追及された⁽¹³⁾と述べ、そのかぎり、もともと歴史的な原理としてインダストリが提示されたことを忘却している——すくなくとも想起せしめない——のも、この制約にもとづくものである。また、右のモデルは、おなじく合理主義的な制約によるそのいちじるしい抽象性と外見上の自己完了性とのゆえに、それ自身が社会の展開のモデルであるにもかかわらず、どのような径路で自由な生産者とインダストリの原理とがこれに先立つ奴隷（農奴）とレイバーの原理とのなかから成立して来るか、このばあい新旧の社会が相互にどのような対立をはらむかを、説明することができない。すべての農民の政治的自由は、しかし、近代のブルジョア的生産関係の一定の展開を前提とするものなのである。『原理』にあつては、いわゆる「移行」の問題の説明は、たんに、中世末期における商業の発展、とくにいわゆる商業革命——ステュアートはつねにこれを *revolution* と表現する——という外的要因の指摘にとどめられている。だが、モデルのこのような抽象性は、一方での具体的な経済史的記述によってかなりの程度まで有効にゆるめられている⁽¹⁴⁾。また近代社会と原始社会との混同は体系の展開上につけて重大な錯誤を生

んでいるのではない。したがって『原理』のモデルが近代社会の原理の説明のためにつくられたことはまったく明白である。すなわちそれは、⁽¹⁵⁾ 奴隷 (および農奴) 制度を否定する意味での「自由の精神」 (spirit of liberty) によって支えられ、「封建的・軍事的な」 (feudal and military) 政府に代って「自由で商業的な」 (free and commercial) 政府をもつ社会のモデルなのであった。⁽¹⁶⁾

(11) *Principles*, I, 36/47.

(12) cf. I, 30/39; 36/47; 46/60.

(13) I, 161/217.

(14) この論点については別稿で取扱う予定であるが、さしあたり、筆者稿「ジェイムズ・ステュアートの経済学説」、前掲、前編C章を参照。

(15) I, 27/35.

(16) I, 10/13.

したがってわれわれは、近代社会のこのようなモデルにおいてその構成単位が基本的には、独立の商品生産者であることを、最初に確認しておくてはならない。近代社会の特質とされた、「相互的責務」にもとづく「一般的依存関係」は、不労所得者を除いても、⁽¹⁷⁾ とも純粹に成立すべきものだからである。このゆえに『原理』にあっては、フーマーとフリー・ハンズとが「二大基本階級」 (two principal classes) なのであって、⁽¹⁷⁾ やがてとりあげられねばならない不労所得者層はすべてフリー・ハンズの一部分を成すにすぎず、したがって地主は基本階級という地位を与えられてはいない。この点はケネーとの対比においてははっきりと把握しておくべき点である。そうして他方、右の⁽¹⁸⁾ ぎり、『原理』のモデルは、著者の敬重したヒュームの『政治論集』 (*Political Discourses*, 1752) における近代社会のモデルの踏襲なのであった。すなわちヒュームにおける、農工分離Ⅱ社会的分業の展開という観点、インダストリ

と奢侈とを生産力的な原理とする自由な商品経済の把握——したがって質樸を原理とする、農民的・軍事的な古代社会との対比——、社会的剰余の費消方法と人口の構成および増加との関連についての歴史的認識、これらは——注におけるヒュームからの引用を参照⁽¹⁸⁾——すべて、『原理』がその体系の起点において依拠したものであり、このゆえに、当時の学界のトピックであったウォーレス対ヒュームの人口論争に対して、この書の第一編は明示的に後者に加担し、ヒュームのモデルを理論的にいっそう鍛えようとしたのであった。そうしてこのばあい、直接に商品をつくる労働とたんなる使用価値をつくる労働との区別を、上述のようにまずブルジョアの労働と古代のおよび中世的労働との形態的区別として——すなわち自由な労働と強制労働との区別として——把握し、ついで、農工分離の展望を持たぬ自由な小農の社会の労働をも、それが使用価値をしかつくらぬという理由から、これを近代的労働とすることを拒否する点⁽¹⁹⁾に、ヒュームの継承＝ウォーレスの批判におけるステュアートの認識の深さと配慮の周到さが示されることとなるのである。

(17) *Principles*, bk. I, chap. x の題名。なお I, 46/59 には 'two capital classes' である。

(18) ヒュームにおける近代社会の把握については、さしあたり、筆者著『経済学の形成時代』第一章を見よ。ここでは『政治論集』の「商業について」(Of commerce) の章から二つの箇所を引用しておく。「すべての国家の大衆は農、民 (husbandmen) と工業者 (manufacturers) とに分けられるであろう。前者は土地の耕作に従い、後者は前者の提供する原料を人間生活に必要な・あるいはこれを飾る・あらゆる財貨に仕立てる。人間は、おもに狩と漁とで暮らす野蛮な状態を離れるやいなや、かならずこの二つの階級に分れる——農業という技術 (arts of agriculture) に、はじめは社会の大多数の人間が従うのではあるが。時間と経験とがこの技術を進めると、土地は、その耕作に直接従う人間や、この人間に不可欠な工業製品を提供する人間よりも、ずっと多くの人数をたやすく維持することができるようになる。この剰余人口 (superfluous hands) が、ふつうに奢侈的技芸 (arts of luxury) と呼ばれる高度の技芸 (finer arts) に従事することとなれば、彼らは国家の幸福を

ステュアート『原理』における「奢侈」について (一)

増加させる。なぜなら彼らは多くの人々に、ほかのばあいには得られないはずの享樂を持つ機会を与えるからである。」とこゝろで、この剰余人口の就業のためには別の方策も考えられるであろう。それは生産者の消費的欲望 (Desires and wants) を抑え、商人と工業者との代りに軍隊を養うことであるが、このばあいには国家の偉大と人民の幸福とは対立する。「君主の野心は個人の奢侈を侵さねばならぬが、個人の奢侈もまた君主の軍事力を減少させその野心を妨げねばならない。」スバルタその他の古代のいわゆる共和国はこの実例を示すものである (David Hume, *Writings on Economics*, ed. by E. Rotwein, 1965, pp. 5-7. 傍点は原文のイタリック)。「世界のすべてのものは労働で買われるのであり、われわれの渴望 (passion) のみが労働の原因である。国民が工業と機械的技術 (mechanic arts) とを豊かに持つばあいには、地主も借地農も共に合理的技術 (science) としての農業を研究し、そのインダストリと注意とを倍加させる。彼らの労働から生まれる剰余生産物 (superfluity) は失われずに、これらの財貨をひきあてとして、人々の奢侈がいまでは切望する工業製品と交換される」(ibid., p. 11)。なお、剰余生産物を生む労働としてのインダストリという用法については、p. 10 を見よ。それは skill とか assiduity とかいう言葉と並用されている。すなわちヒュームではまだ、この語は強制労働との対立を十分に意識した歴史的なセンスで用いられているわけではない。

(19) cf. *Principles*, bk. I, chap. xiv. それはステュアートによれば、インダストリとなるべき農業「労働」の歪曲 (abuse) であった。こうして彼はまた、「交換価値であらわされる独自の・社会的労働と使用価値をめざす現時的労働とは、はゞきり區別した」(Marx, *Zur Kritik der politischen Ökonomie*, a. a. O., S. 56. 邦訳「前掲」五一頁) である。なお、ウォーレンス・ヒューム論争については、筆者著『形成時代』(上掲)第一章を見よ。

二一

こうして『政治論集』とおなじく『原理』においても、自由な人民の生産物が相互に等価物として交換される過程の進行は、一方に社会的剰余としての農業剰余の増大に、他方にこれに見合う工業製品の増加に支えられるのみならず、このばあいとくに後者は「奢侈的技芸」と呼ばれて人口の増加に対するその意義を擁護され、⁽²⁰⁾ そのかぎりインダ

ストリといわば合体した原理である。だが、ヒュームにおける「奢侈」あるいは「奢侈的技法」が、インダストリともいわば同一の社会的原理——近代を古代から分つ——の表裏の表現にすぎなかったのに対し、⁽²¹⁾ステュアートのばあいには、はじめから「奢侈」という原理に独立の意義が与えられており、それが『原理』の理論的展開の方向を決定づけるものとなっているのである。もともと『原理』にあつては、近代社会の展開を伴う人口増加⇨商品経済拡大の過程は、著者が商品経済の本質である社会的生産の無計画性を認識することのゆえに、ヒュームの想定のように順調におこなわれるものとは考えられていず、このことから『原理』は、右の重大な事態の解明とこれへの対策の考究とを、農業の発達⇨人口の増加に作用する「社会的諸原因」(Political causes)の研究という困難な課題として、みずからに課したのであつた。⁽²²⁾したがって、ウォーレス⇨ヒューム論争における後者の継承というステュアートの立場は、けつして『原理』が『政治論集』の立場とその理論的骨格とをそのまま継承したことを意味しない。前者は後者への批判をも同時にふくむのであり、それは第二編に至つてヒュームに対する貨幣・貿易論争となつて明示されることとなる。だが、第一編においても、ヒュームへの批判の意図はウォーレスへの批判を優先させるために抑えられながらも、「奢侈的技法」に対応する「奢侈」という原理の独立の意義は、右の「社会的諸原因」に関連して、それ自体としてはじめからはっきりと提示されるのである。

(20) *Principles*, I, 25/32.

(21) ヒュームの『政治論集』は「はじめから「奢侈について」(Of luxury) という論説をふくんでいたが、この論説は第五版(一七六〇年)から題名を「技法の洗練について」(Of refinement in the arts)と改めた。それは「奢侈」という語に結合していた悪徳という倫理的判断を避けようとしたからであるが、このいいかえは、ヒュームが「奢侈」(消費・需要の面)と「いい」(生産・供給の面)という二つの対応する要因を、近代社会の展開のために組み合わせられるべき異質の要因

ステュアート『原理』における「奢侈」について (一)

と考えていたのではないこと、いなむしろ、「奢侈」をインダストリアルアートに必然的に内在する、その展開の心理的誘因と考えていたことを示している。

(22) I, 25/33.

まず、『原理』第一編ですべてその第五章において、人口の増加をその自然的不能 (physical incapacity) の限界以前に停止させる社会的不能 (moral incapacity) の限界の存在が指摘されるとともに、⁽²³⁾ 後者を打破すべき「奢侈的技法」の意義についてつぎのように述べられ、つづく第六章での主要な展開が予示されている。「……われわれが『理論的モデルのかたちで』対象としている国において、貨幣も奢侈的技法もともに知られていないとすれば、そこではフーマーの剰余は、住民の他の全必需品を生産するのに十分とみとめられる労働をおこなう人々の数と比例を保つことになるであろう。そうして、それが実現されるやいなや、消費と生産とはちょうど均衡するにいたり (the consumption and produce becoming equally balanced) 住民は、その欲望 (wants) が増大しないかぎり⁽²⁴⁾ はもはや増加しないし、増加するとしてもきわめておぼつかないであろう。」われわれはこの引用から、『原理』における「生産と消費との均衡」が人口の増加、商品経済の展開のために打開すべき静止の状態であって、『国富論』において再生産と資本制的蓄積との見地から論ぜられた「年々の生産と消費との均衡」 (balance of annual produce and consumption)⁽²⁵⁾ とはことなる意義を帯びていることを知るであろう。そうして「奢侈的技法」に伴うとされる、貨幣とその支出をつうじての消費とは、この静止の状態を打ち破るべき不可欠の要因なのであった。

(23) I, 29—30/38—39.

(24) I, 31/40. 傍点非引用者のみ。

(25) Adam Smith, *Wealth of Nations*, ed. by E. Cannan, vol. I, p. 461. 大内訳、岩波文庫版、第三分冊、一一一

もとより、右のばあい「奢侈的技芸」と貨幣との経済的効果とされているものは、基本的には、まず需要であり——だから第二編の実質的展開は第二章「需要について」(Of demand)からはじめられる——、ついではとくに追加的有効需要一般であつて、貨幣的分析の体系としての『原理』の性格はすでにここに明示されているわけである。のちの第一編第十八章におけるつぎのすぐれた説明は——『原理』の展開はいくどもくりかえしを重ねつつらせん状におこなわれてゆく——このことを十分に理解させるであろう。「人口増加が農業」の発達の主要原因なのであるか、それとも農業が人口増加の主要原因なのであるか。／わたくしの答へでは、なるほど社会の未発達な段階では万人の手に入れうる大地の自生物が人口増加の主要因……であるが、「労働によって維持される、社会のより進んだ段階では」人口増加が農業の主要因である。このことは説明の必要がある。／……すでに述べたように、住民の増加のためのファンズとなりうるものは、農業の生産する剰余である。さて、この剰余に対する需要(demand)はかならず存在する。飢ゆる者は誰でもこれを需要するであろう。しかしこういう需要のすべてが満たされるのではなく、したがって結局何らかの効果を生むということもないであろう。需要者は提供すべき等価物(an equivalent)を持たなくてはならない。この等価物こそ全機構の起動力(spring of the whole machine)なのである(この傍点小林)。なぜなら、それがなければファーマーはいかなる剰余をも生産しないであろうし、その結果、たんなる生存手段だけのために労働する人々の階層におちぶれるだろうからである。……さて、農民(husbandman)を等価物の獲得のために働かせるところのものは有効需要(effectual demand)と呼ばれるべきものであり、この需要は提供すべき等価物を持つ人々の増加によって増大するのであるから、人口増加が原因で農業「の発達」が結果だといふのであ

(26) この立言こそ、貨幣的分析の方法においてはるかにステュアートとケインズとを照応させるところのものである。そうしてまた、右のかぎりでは、『原理』の認識は、生産者大衆の所得すなわち wage が「本来すべての活動の最初の起動力 (first spring of all the motion) である」とした、ダニエル・デフォウ——スミスの自由貿易論の真の意味での先駆者——の認識と遠く隔たらないようにも見えるであろう。

(26) *Principles*, I, 114-5/133-4. 傍点は原文のイタリック。わたくしの知るかぎり、有効需要の語をはじめて用いたのはステュアートである。スミスはこの語をステュアートから受けて、その意味内容を消し去ったのであった。

(27) Daniel Defoe, *A Plan of the English Commerce*, 1728, p. 103.

しかし、序論に述べておいたように、『原理』第一編のつづく第六章「人類の欲望はどのようにその増殖を促進するか」は、需要↓有効需要の問題をただちに「奢侈」の問題として取扱うこととなり、それによって『原理』の理論的特質をさらに深層において明示することとなる。そうしてこのばあいわれわれの注目すべき論点は、たんに「奢侈」に与えられる定義や「奢侈」の経済的効果だけではなく、さらにすすんで、自由な生産者たちのインダストリによる「一般的依存関係」——ファーマーおよびフリー・ハンズという「二大基本階級」の各成員の商品生産者としての「相互的責務」——を基盤として構成された近代社会のモデルのなかに、「奢侈」という行為の担当者として富者 (the rich) が登場し入り込む道筋なのである。

ステュアートによれば、さきに想定された自由で単純な農民社会に自然的条件がそなわりかつ住民のインダストリが保たれるとすれば、「奢侈」と貨幣とはそこに必然的に導入されるであろう。ここに「奢侈」というのは、「人間の労働または工夫くわすによって生産され・われわれの生活上の官能または嗜好をよろこばせ・われわれの衣食をみだし悪

い氣候を十分に防禦するという必要をこえる・のみならず、われわれを傷つけうるあらゆるものに対する保障をこえるような、すべての物の消費⁽²⁸⁾のことである。ところで「奢侈」のこのような定義は、もっぱらその経済的效果という観点からおこなわれたものである。すなわち、「わたくしの主題はモラルの教条とはちがうのだから、わたくしは奢侈という用語を政治的な意味以外には、——というのは、就業 (employment) をつくりだし・富者の需要を叶える人々にパンを与えるところの原理として以外には——考究する必要を持たない。」⁽²⁹⁾——ところが、理論の展開のこの基底的部分においてすでに、「奢侈」とは商品生産者(近代の「自由な社会」におけるアトム)に密着した機能なのではない。というのは、右の第二の引用で知られるように、近代社会はその展開のための不可欠の因子としてすでに「富者」の存在を前提とするからである。

(28) *Principles*, I, 31—2/41.

(29) I, 32/41, footnote. 傍点小林。初版と全集版とは重要でないわずかな差異がある。ここでは全集版による。なお、ステュアートが「奢侈」に与えた経済学上の定義としては、脚注のこれにつづくつぎの部分もたいせつである。——「この理由からわたくしは奢侈について、濫用・淫逸・過度等の観念をすこしも持たぬ上述の定義を与えたのであるし、またここでは、外国貿易に関するその有害な結果を考察することさえおこなわない。ここで取扱われる諸原理は人類一般についてのものであり、奢侈の効果は人口増殖と農業とにかかわるかぎりでのみ考察されるのである。われわれの理論づけは、諸国民の個別の利益やトレードの原理を検討することになると、またちがった方向をとるであろう。／＼……わたくしの主題は、モラルないしは政府 (Government) についての教条との混合を許すには、たとえそれらがどれほどこれと密接に結び合っているように見えるとしても、それだけですぐに広汎に過ぎるものである。そうして、わたくしが諸観念をできるだけ単純化してそれらの結合をふり捨てることから始めないならば、わたくしはただちに途を失って解きたい錯乱のなかに巻き込まれるであろう」(I, 32/41—2. 傍点は原文のイタリック)。——ここに、「奢侈」の経済理論的分析を、近代商品経済の展開を説明するうえでの広汎な課題として『原理』がこころざしていること、また、当面の段階では、序文に例示した外国貿易の問題が捨象さ

ステュアート『原理』における「奢侈」について (一)

れていること、が示されている。奢侈論における外国貿易の導入は『原理』第二編においてであり、この小編では次章で取扱われる。

もっとも、ここまでのところでは、「富者」はそのなかにひろく商品生産者をもふくむと解すべきであろう。事実、『原理』第一編第八章でこころみられている、イングランドの人口と経済との政治算術的分析においては、いわゆる「土地のレント」(ファーマーの剰余生産物の価格)の一部が——表現に混乱を残しながらも——ファーマー自身の手に残るとされているからである。⁽³⁰⁾のみならず、フリー・ハンズもまた、第一編第五章ではその労働によって剰余農産物を求める貧窮者 (the necessitous) として出発するとされながらも、⁽³¹⁾ やがて利潤部分を生みだしてこれをみずからのものとすると考えられており、この觀念が、第二編における価格と生産費との分析の基礎の一隅に置かれているのである。⁽³²⁾しかし、それにもかかわらず、『原理』における「奢侈」、とくに、そこでその経済的機能の分析がこころざされている「奢侈」とは、生産者大衆の奢侈とかならずしも同義ではない。このことは、近代社会の本格的展開にあたって「奢侈」とともに導入されるべき貨幣についての『原理』の把握が、いっそう明らかにするであろう。すなわち『原理』は、さきの「奢侈」の定義につづいて貨幣の定義をまずつぎのように下している。「わたくしは貨幣 (MONEY) をこう解する。それは、それ自体では人間にとって上述の諸目的〔前注28〕のためには何らの実質的な役立ち (material use) を持たぬけれども、しかしそれについての人間の意見にもとづいて、価値と呼ばれるものの普遍的尺度となるような、また譲渡できるあらゆる物に対する適当な等価物となるような、評価を獲得したところの財貨である。⁽³³⁾」この定義自身はなお、『原理』の貨幣理論の全構造のなかに置かれ・ステュアートみずからによる修正を——それによる混乱をも露呈しつつ——経なくてはならないであろう。だがここで重要なのは、貨幣についての

このような把握が、ただちにつきの説明に移行していることである。「ここに新しい場面が展ける。この貨幣は住民のうちの特定の人々の手中に、というのとはもとより、それを案出する智力 (the wit to invent it) を持ち・それを食物や必需品に対する等価物 (an equivalent value) として——つまり労働も苦勞もなしに他人の労働ばかりか食物をさえも取得する手段として——同国人にたしなませる手管を持った人々の手中に、見いだされるはずである。」⁽³⁴⁾すなわち、「奢侈」の経済的機能を發揮させて近代社会の本格的展開をはじめて可能とする貨幣は、はじめからこの近代社会のうちの特定の選ばれた人間の手中に置かれ、これらの人間は商品生産者としてではなく、「労働も苦勞もなしに他人の労働ばかりか食物をさえも取得する」階級として、彼らの「奢侈」の機能を果たすこととなるのである。『原理』はこのような貨幣を社会における「新種の富」(new kind of riches)⁽³⁵⁾と呼び、この社会での生産力の發達はすでにあらゆる成員の扶養を可能にしているのであるから、「ここに生ずる自然の結果は、貨幣を持つものは労働をやめて、しかも消費するであろう」⁽³⁶⁾ことをふたたび確認している。『原理』における「富者」、「奢侈」の機能がそれに帰せられる特定の階級とは、『原理』の基本的な理論的モデルにおいてすでに、このようなものだったのである。そうして、ウォーレスを正面の論敵としてヒュームに左袒したこの書の第二編が、すでに第二編の貨幣・貿易理論におけるヒュームへの批判(重商主義の復権のころみ)を予定しつつ、慎重に組みたてた近代社会の図像が、ヒュームのそれと対立するものであったことも、以上によって明らかであろう。

(30) 筆者稿「ジェイムズ・ステュアートとグレゴリー・キング」(本誌十二ノ三)を参照。

(31) cf. *Principles*, I, 27/35.

(32) 筆者稿「ステュアート『原理』における「利潤」について」(本誌十四ノ二)を参照。前注(30)と本注との本文に示されるステュアートの把握、すなわち生産過程一般における剰余価値部分の發生と生産者へのその帰属との把握は、古典経済学

の形成という問題領域ではきわめて重要な意義を持つ。ただ、すでに知られるように、本稿の関心はさしあたり別のところにある。

(33) I, 32/42.

(34) *ibid.*

(35) I, 33/43.

(36) *ibid.*

三

「奢侈」を社会的機能とする富者の階級は、このように、近代社会の展開の理論的モデルのなかで、智力にもとづく貨幣の「案出」によって成立するものとして、またその機能によって近代化を進めるものとして、取扱われた。それは独立の商品生産者たちが形成する「自由社会」における非勤労者の階級であり、経済的優位を保持する階級である。『原理』は当面のわれわれの対象である、第一編第五・六章に先立つ第四章のなかで、もっとも抽象的なかたちで人類史における支配＝隷属関係の成立を描き、大地への労働の投下が社会的剰余を生むにたがって、人間に内在する自愛心 (self-love) がすぐれた能力を持つ者に「生産手段と」右の剰余を専有させるに至り、爾余の者は *servant* となり *slave* となること、また子の親への従属 (*subordination*) と *servant* の *master* への従属とが社会と政府との起源として推論されるが、第一の従属が自然的なものであるのに対して第二の従属は社会的 (*political*) なものであること、を述べた。このばあいの一般的な支配＝隷属の原理が近代社会においてどのように貫徹しまた変貌するとされるか、近代以前の支配階級が具体的にどのようなかたちで近代社会の表象のなかに残存しているか——これらは『原理』の体系の根本的性格を決定するうえにもっとも重要な論点であり、わたくしの小論の目的も

ひとつにはこの論点の解明に寄与しようとするにある。もとより『原理』自身も、理論的に、あるいは経済史的記述として、しだいにこの問題を展開するのであり、それはその理論的展開の範囲においては、やがてこの小論の分析の対象となるであろう。⁽³⁷⁾しかし、近代社会の展開についての当面の第一編のモデルにおいては、まさにインダストリの発生について指摘したばあいとおなじように、これらの問題はいちおう抽象されているのであり、そこでの富者、みずからの「案出」した貨幣を持つことによってフリー・ハンズの特殊な一部分となった階級の、社会的機能の分析が、ただちにおこなわれることとなる。それは具体的には、自由な商品生産者であるファーマーとフリー・ハンズとの「二大基本階級」のあいだに、「富者」という特定の非生産者が加わったばあいの、経済循環の描出である。

(37) さきにおことわりしたように(本章注14)、『原理』における歴史的記述については別稿で分析する予定である。

貨幣所有者の階級の成立につづいて『原理』は述べる、「さてここに、労働をしないで生活し大地の生産物を消費する、一群の住民がいることとなる。食料はすぐに欠乏するであろう。これへの需要は増大するであろうが、それは貨幣で支払われるであろう。これはすべてのもののうちで最良の等価物である。「したがって」多数(「のファーマー」)が犁にとびつくであろう。ファーマーの剰余生産物は増加するであろう。「他方」富者は(「フリー・ハンズのつくる」)剰余生産物を求め、フリー・ハンズはそれらを提供して、その代りに(「ファーマーに対して」)食料を需要するであろう。フリー・ハンズは、以前のようにには農民(Husbandman)の負担とはならなくなるであろう。フリー・ハンズからその労働またはサーヴィスを雇うところの富者は、これに貨幣で支払わねばならないが、フリー・ハンズの手に入った貨幣は、「ファーマーによって」追加された農業(労働)の生産した剰余の食料に対する等価として役立つであろう。」この説明は、『原理』の体系にとってはとくに重要である。すなわちここでは、独立・自由のファーマーと

フリー・ハンズとの「二大基本階級」が構成する「近代社会」の運動、すなわちこの社会の経済循環と規模の拡大（農工分離・商品経済化の進展）とは、具体的には富者の貨幣支出すなわち「奢侈」を誘因としておこなわれるとされているのである。それはステュアートが、ケネーにおけるような再生産の構造の解明を課題とせず、また生産資本の把握と分析との欠如によってこれを可能とする段階にも達せず、⁽³⁹⁾こうして、スミスがケネーをふまえて資本制的蓄積の理論を構築したのに対して、資本主義の成立の過程である原始的蓄積の過程を理論的に体系づけようとしたこと、しかもこのばあいには、富者の意義をその推進者という点に求めようとしたこと、にもとづくものであった。このことの理解は、のちに閑説するように、ヒュームをもふくむ重商主義解体期における『原理』の位置を示すであろうし、同時代のカンティロンや重農学派の奢侈論の理解のうえにも何らかの意義を持つであろうし、またとくに、のちのマルサスの有効需要論とステュアートのそれとの相違の根本点を明らかにするに役立つであろう。——ともあれここに至れば、近代商品生産社会が、ファーマーとフリー・ハンズとの「二大基本階級」から成るだけではなく、フリー・ハンズの側に——というのは土地から離れて——不労所得者の階級が、第二次的にながら不可欠の構成要素としてふくまれることを、あらためて確認しなくてはならない。そこで第一編の第九章に至って『原理』はいう、「フリー・ハンズを二つの階層に分けなくてはならない。その第一は、この「ファーマーの」剰余を直接に取得するか、あるいは既得の貨幣収入でこれを買う者。その第二は、日々の労働または個人的サーヴィスによってこれを買う者⁽⁴⁰⁾」。そうして、右の第一の階層のうち前者は地主 (landlord) であり、後者は貨幣所有者 (monied interest) なのである。⁽⁴¹⁾

(38) *Principles*, I, 33/43. この重要な文章の、『原理』の人口論における位置については、筆者稿「ステュアート『原理』

における人口と農業生産力」(本誌十三ノ四)を参照。

(39) このゆえに、『原理』における「経済表」を描こうとするころみ(田添氏)は、不可能であるか形容矛盾であるかである。それはカンティロン⁽³⁹⁾の分析にあたって彼の「経済表」という語を用いることが拒否されねばならない(渡辺輝雄『創設者の経済学』、二九四―五頁)のおなじ意味においてである。わたくしがここで再生産の語を描いて経済循環の語を用いるのも右の意味からである。

(40) *Pirnciples*, I, 48/63.

(41) I, 153/205.

このようにして『原理』にあつては、近代社会の展開は、「自由人」である独立の商品生産者を主体とし、彼らのインダストリを動力とし、富者の「奢侈」を不可欠の誘因として、おこなわれる。そうしてこのばあい、生産者大衆の生活水準の向上という意味での「奢侈」は、誘因としては副次的であるのみならず、次章で示すように、すすんでまた、この誘因に対する阻止的要因と考えられているのである。もともと、『原理』の上述のモデルは、そのきわめて抽象的な構造のゆえに、一方における『原理』でのモネタール・ジステームの残存とあいまって、誘因としての大衆的「奢侈」を拒否すべき必然性を持っていた。それはこういうことである。さきに知ったような、『原理』における貨幣の定義は、それにつづくもつとも安易な、「案出」による貨幣の成立の説明にもかかわらず、第二編での説明でわかるように、国富の基礎にその不可滅性のゆえに最大のいわゆる内在的価値(*intrinsic value*)を持つ貴金屬を置くという考えを、本筋として予想するものであった。ところが第一編でのモデルは、それ自体としてはむしろきわめてすぐれた理論的構想によって、外国貿易を抽象していた。(ここから第一編はその末尾に近い第十章⁽⁴²⁾に至ってはじめて、人口と農業との増加・発展を理論的に跡づけるという努力の終点に、人口増加の極限に達した特定の国民が工業製品の輸出による食料の輸入という段階を持つことを論じた。——だからそこでは、外国貿易は近代社会の

一、⁽⁴³⁾ 一般のモデルの問題としてでなく、また貿易差額＝貴金屬の國際的移動の問題としてでもなしに、取扱われているのである。だがそうとすれば、貴金屬貨幣はどのようにして近代社会における富者の手に入り、しかもそれがこの社会の展開のたえざる誘因として「奢侈」をつうじて流通に放出されるか。——『原理』はこの問題に対して、一方では具体的な歴史的記述の導入（モデルの修飾）によって、他方では第二編での理論的展開における外国貿易の導入（モデルの具体化、現実への接近）によって、解答を与えようとする。この第一のばあい、『原理』によれば、貴金屬は外国貿易——いっそう根本的には西インドからの収奪——がなかったとしても、封建的支配者によって流通の外にすでに多量に退蔵されていたのであり、⁽⁴⁴⁾ また第二のばあいには、貿易差額の順逆は重要な関心の的とされねばならぬものである。しかしともあれ、この前者のばあいのように、封建的支配階級が近代の「自由社会」のなかに富者として入り込んでくるならば、インダストリの発展による社会的剰余は、とくに地代のかたちで、すくなくともその一定の部分を、いまや近代的地主と化したこれらのフリー・ハンズに、収取されるであろう。『原理』第一編がその第六章で示したものは、そういう社会の表象であった。したがって、富者の「奢侈」の意義の強調は、大衆の「奢侈」のそれを否定しないまでも、すくなくともそれを軽視させるであろう。つぎに、後述のように、貿易差額への関心は輸出商品のコストの観点からする生産者大衆への低収入の要請としてあらわれ、いわゆる高「賃銀」はこのかぎり近代社会の展開の阻止的要因となるに至る。——このようなかたちで、富者とその「奢侈」とは近代社会のなかにその存在と機能とを定着させた。それは根本的にはヒュームのばあいとことなり、すでに早くニコラス・バーボン——イギリス重商主義政権への後向きの批判者であったトリー・フリー・トレーダーのひとり——が、*industry in the poor, and liberty in the rich* と書き出しに要求した立場⁽⁴⁵⁾の究極の到達点なのであった。

(42) *Principles*, bk. II, chap. xviii: Of the causes and consequences of a country being fully peopled. 〱第十九章は機械の導入を論じ、第一編の展開はそれで終る。このあとさらに二章がつづくが、それは補遺と要約との章である。

(43) 本文でつづいて述べるように、『原理』の当面のモデルは、『原理』の全体系そのものが結局は脱しえなかつた方法論的制約のゆえに、モデル自体の限界を別としても、さらに全体系とのあいだにさまざまな違和を持つこととなり、『原理』諸編の展開は、むしろ当面のモデルが樹立した近代社会像の崩壊の過程を示しているといふことができる。そうしてこの事情はすでに、「奢侈」と貨幣とがモデルに導入される直前の第五章で、人口増加・農工分離の要因として外国貿易がわずかながら先取的に論及されていること(Ⅰ, 28—9/36—8)に示されている。なお、これも後述のように、このおなじ場所でフリー・ハングの出自を、ファーマーのなかにではなくモデルの外の狩猟者に求めていることも、第二編を予想しつつ、右と同様の事情を示している。

(44) 「近代に入つて」このように大量の貨幣を流通に投じさせたものは、インダストリの発展を求める一般の嗜好であつて、アメリカの発見なのではない。……昔は節約が最大の富と共存した。だからアメリカの富がヨーロッパの新文明の原因だつたのではなくて、市民的自由の拡張が、かつてはもっとも富んだ者の財産の一部であつた人々のサーヴィスを確保するため、財宝の所有者に金蔵を開かせ、いつの時代にも渴望されてきたその財宝を世に出すことを余儀なくさせたのである。これ「この解放——全集版」(「レストレードとインダストリとの基礎である」(Ⅰ, 441/Ⅱ, 149—1)。これは第二編の補遺(第三十章)での記述であり、ここでは古代以来の富の近代への継承が例示されているが、第一編(第十章)では、当時のフランスにおける大道路の建設がやがて就業と消費との増大を刺戟し、「富者の財庫から貨幣を勤勉な者に引き出す」(Ⅰ, 58/76)は必ずあることを説いている。

(45) cf. Nicholas Barbon, *A Discourse of Trade*, 1690, Hollander's reprint, 1903, p. 31. 久保芳和訳『バーボン・ノース『交易論』』五一頁。

ところで、貨幣となる貴金属を「財宝」として退蔵する富者が「奢侈」をおこないはじめること——消費性向を高めること——、それによって、近代的展開の出発点に立つ「自由な社会」が上述の「もっとも純粋な単純性」から開

明化してゆくこと、しかもこの過程で「生産と消費との均衡」＝生産力の停滞がたえず打破されて農工分離と人口増加とが実現されつづけること、このプロセスのたえざる進行は何によって保障されるのであろうか。それは『原理』にあっては、為政者 (statesman) が、ファーマーの剰余に等価を提供すべき、フリー・ハンズの仕事を留意することによってである。もとより、前提とされた「自由な社会」にあっては、ステイツマンは生産者の人格への直接的支配はおこなうことができない。「その人民を力づけていると想定されている自由の精神と十分に一致しつつ彼が行動しようと思えば、与えられている手段はただひとつ、貧窮者の手にさまざまな仕事 (employment) を考え出してやり、彼らがその労働によって、ファーマーがその剰余生産とひきかえに受取ることができるような等価物を生産するようにしてやることである。」⁽⁴⁶⁾しかし、われわれがすでに知ったように、貧窮者は仕事を新らしく与えられても、実際にはその生産物をすべて直接にファーマーに売るのはなく、まず流通のための「適当な等価物」としての貨幣を入手するために、富者にこれを売らねばならず、一方ファーマーもまた、富者の消費性をたえずある程度の水準に保たせるためには、これに地代を支払わねばならないであろう。また、具体的なばあいとして、右の貨幣が外国貿易によって獲得されねばならないこととなれば、貿易差額のプラスを実現するための方策が必要となり、この局面では、貿易商人あるいはマニユファクチュア主としての富者、いわゆる *monied interest* が登場して、貧窮者としてのフリー・ハンズと関係を持つであろう。このようにして、『原理』における「自由な社会」での経済循環とその拡大とのプロセスは複雑なメカニズムを持ち、したがってそこでの生産と消費との停滞的均衡を破るために富者の「奢侈」をひき出し、あるいは時としてこれを調整すべき、ステイツマンの「ただひとつ」の手段も、きわめて複雑な内容と構成とを要求されることとなる。この問題が詳細に展開されることとなる第二編で、ステュアートはつぎの

ように述べた。「政体 (government) と機械とはおなじようなものであって、単純であればあるほど堅固かつ永続的であるが、手が込んでつくられていなければならないほど、有用にはなっても故障がおこりやすい。「ギリシヤの」ラケダイモン人の「社会」形体は、あらゆる機械力のうちでもっとも堅固かつ緊密なものである楔に此べることができ、近代諸国家の形体は、しだいに損じてゆくものである時計に比べられる。あるときはぜんまいが機械にとつて弱すぎ、あるときは強すぎる。そうして歯車は、それがグラハムとかジュリアン・ル・ロワとかいう上手の手でびったりと組合わされていないときには、互いによく噛み合わない。そうすると機械はとまり、むりに動かせば一部は壊れる。そうしてそれを直すために職人の手が必要となるのである。」——独立生産者層の両極分解の過程として資本主義の創世記を成す原始蓄積の全過程は、これを前近代的・計画的・自給的経済に対する自由な商品経済の展開としての局面においてとらえた『原理』においては、そのブルータルな特質をばかしつつも、利己心 (self-interest) あるいは私益 (private interest) に対するステイツマンの誘導——コントロール——の細緻な構成とその展開として把握される。この把握は歴史的真理の半面をつよく照射し、『原理』の大きい貢献である。だが、そういう把握に立つ『原理』の理論構成の特質は、右のステイツマンの誘導のモチーフを、富者の「奢侈」をひき出す点におき、この視角から貨幣的分析の色彩をみずからの体系に与え、ここから一連の貨幣的政策を要請することとなる点に存する。それはすでに、重商主義の解体期における特定の、「富者」の利益を裏づけるものなのであった。(未完)

(46) *Principles*, I, 27/35.

(47) I, 249—50/331—2.